

核戦争防止 兵庫医師の声

第 89 号 2013 年度 6 月号

発行 核戦争を防止する

兵庫県医師の会

〒 650 - 0024

神戸市中央区海岸通 1-2-31

神戸フコク生命海岸通ビル 5 F

兵庫県保険医協会内

電 話 078 (393) 1807

振 替 01130-6-57830

大熊町調査報告

高線量の警戒区域内 避難住民の苦しみ募る

郷地 秀夫 代表

昨年 11 月 10 日に大熊町の協力を得て、放射能汚染の状況調査のため、警戒区域とされる原発から 2 キロメートル地点まで調査に入った。

町役場や老人ホーム、工場など、原発から 2 ～ 5 キロメートル圏内を訪問し、持参した多数の空間線量計や α 線測定器で記録した。

警戒区域内の空間線量は、45 ～ 60 マイクロシーベルトという高い値を記録した。雨どいや溝では、150 マイクロシーベルトや 200 マイクロシーベルトの箇所もあった (写真 1)。

また、植物の葉や花などを採集し、デジタルイメージングプレートに焼き付け、保存している。線量が高ければ黒くなるが、型で押したように植物の形が真っ黒に写った (写真 2)。汚染が非常に高濃度であることがわかる。

土を採取しており、今後ゲルマニウム検出器にかけて、プルトニウムやストロンチウムが含まれていないかなど、詳細に調べたい。

2 年前のままの家

見えない展望

町民の方の住居にも入れていただいた。室内は、地震が起きた当時の 2 年前のまま。テレビが落ち、台所には洗いかけの茶碗がおかれ、洗濯物も干したまま。片付ける間もなく、着の身着のまま避難し、いまだに手付かずのままだということがまざまと



集会所の雨どいでは 250 マイクロシーベルトを記録した (上) 現地の植物の放射線をイメージングプレートで記録 (下)

感じられ、今回の調査で最もショックだった (写真 3)。

チェルノブイリ事故で「3 日間分の荷物を用意して」と言われ避難して一生帰れないという話を聞く

1 面からつづく

が、福島でも全く同じだ。町民の方々は財産を全部警戒区域内に残し、まともな補償もないまま生活している。

事故2年となる今年3月、調査に協力いただいた方から送られてきたメールには、町民の苦しい思いがつつられ、やるせない思いと怒りに駆られる。抜粋して紹介したい。

「(大熊町民の) 96%の住民の住む区域は帰還困難区域です。故郷への帰還の目途はたっていません。『中間貯蔵』の調査が、町への事前連絡もなく開始され、国会で帰還できないと引導を渡すような発言があるなど、長期の避難で疲れ切った地域住民にさらに追い打ちをかけています。2年もたってこのような状態です。」「風化が進み、被災地での分断も強くなってきました。立地町と非立地町、原発被災者と津波被災者、強制避難者と自主避難者、東電の賠償金の対象者と非対象者、高齢者と若者などなど、それぞれの立場で分断があり、傷つけあっているような感じがします。賠償といっても、再出発できるような金額ではありません。私のように農業を営んできた者には、農地は血と汗と、先祖から営々と築いてきた、かけがえのない宝です。…強制されて移住させるなら、それ相応の補償があるべきなのに、再調達価格も提示せず、犠牲を強いているのです。」

町民の方々は、突然先祖代々の土地から追い出され、今後の生活の展望をもてないまま、不安や苦しみ、怒りをかかえながら、2年間避難生活を続けている。

生活は何も改善しないのに、事故は「収束」したと言われ、徐々に忘れられている。メディアが取材に来て、あらかじめ決まったストーリーに沿って、必要なコメントだけ取って帰ってしまい、まったく実情を知らせてくれないと、憤っておられた。

国の無策に振り回され、町民は国に強い不信を持っている。国に任せられない、自主的に調査が必要だと、汚染状況を調べ記録してほしいと言われている。

原爆症でもそうだったが、放射線による健康被害が出るのは何年も経ってからだ。その際に、証拠となる記録を残したい。被災地を走った自動車のフィルターを集めて、放射線を分析・記録する取り組みも進めている。



避難者の家の中は震災直後のまま

私だけの力ではできないので、多くの方々の力をお借りし、調査を進めなければならないと思っている。

子どもの甲状腺がん

早期発見のため検診を

事故による放射線が健康に与える影響は、現われるまでに時間がかかることが多く、まだどうなるのか分からない。

福島県は、県民の外部被ばく線量調査で、県民の積算実効線量推計値はほとんどが5ミリシーベルト以下で低いと発表した。ホールボディカウンターによる調査でも、線量が低いことになっている。しかし、回収率や実施率が低いなど、多数の課題を抱えている。

気になるのは、子どもの甲状腺がんが次々と見つかっていることだ。私は当初、今回の原発事故では、チェルノブイリと違い、甲状腺がん患者は出ないのではと思っていた。

しかし、福島県立医科大学の山下俊一教授がNCRP米国放射線防護・測定審議会(NCRP)第49回年次総会で行った記念講演によると、事故当時18歳以下だった福島県の子ども3万8000人のうち3人に甲状腺がんが見つかり、7人が甲状腺がんの疑いが強いという。小児甲状腺がんの発症率は10万人に1人といわれ、非常に高い割合だ。

これについては、全児童の検査を行ったことで、これまでなら見つからなかった患者が発見されたのだと説明されている。甲状腺がんは発症まで最低数

2面からつづく

年かかるので、事故の影響なら潜伏期間が短すぎるという話もある。

しかし、私は、事故の放射線がプロモーター、がん促進因子として働いた可能性を疑っている。

チェルノブイリ事故の後も、がん発症率は事故直後に増え、一度下がってから、また増える。事故直後には、放射線が促進要素として作用して、がん化が促進される。放射線が発がん物質として働くのは、

故・口分田勝先生を偲ぶつどい

温厚でありつつ明確な反核平和の志を想う

会員 近重 民雄

核戦争を防止する兵庫県医師の会の代表を長年務められ、昨年12月2日に亡くなられた口分田勝先生を偲ぶつどいが4月14日、協会などによる実行委員会主催で開催された。会場の神戸市産業交流センターには、医療関係者・平和運動関係者らが集まり、先生を偲んだ。参加者の感想文を掲載する。

4月14日に行われた会に参加しました。参加者は82人で盛会でした。

最初に協会理事長の池内春樹先生のあいさつがありました。その後、口分田先生の知己の方々が順番にエピソードを紹介されました。

いろいろなお話がありましたが、共通していることは、口分田先生のまじめさ、温厚な性格でした。

最後に息子さんの真先生のあいさつがあり、池内理事長からの表彰状ならびに記念品の贈呈があり終了しました。

個人的には会が終わった後、東神戸病院勤務時代の方と話をしたかったのですが、当日仕事を残していたためかありませんでした。私が大学卒業後、東神戸病院にお世話になったときは、すでに先生は同法人の生田診療所の所長をしておられました。病院での会議などで来られるときや忘年会でお会いするときに、いつもニコニコと微笑んでおられ、われわれ研修医に対しても気さくに話しかけてくださいました。

私が東神戸病院を離れ、次に保険医協会で再開す

もう少し後になる。福島でも同じだとすると、今後多数のがん患者が生まれる可能性がある。

早期発見のための検診体制の確立が必要だ。国や県に検診を実施するよう求めるとともに、独自で支援団体が自主検診を進めていく必要がある。住民には、行政の検査に対する不信が強く、検診を受けていない方がたくさんおられる。双葉町では、全日本民医連が検診を開始することが決まったが、その他の地域でも始められるよう関係団体の支援が必要だ。



口分田先生の遺志を受け継ごうと誓い合った

るまで10数年以上の年月が経っていましたが、口分田先生の印象は最初にあったときと変わりませんでした。昔と同様、気さくに声をかけていただきましたので、タイムラグを全く感じませんでした。

その後も数回にわたり「反核医師・医学者のつどい」に同行させていただきました。バス移動のときなど、いつもにこやかに話をしておられたのを昨日のことのように覚えています。

協会の理事会でもよく声をかけていただきました。口分田先生はいつもにこやかで落ち着いた口調でお話をされますが、反核平和に関しての先生の主張は明確でみじんもブレを感じませんでした。

これからは天の上からその柔和な笑顔でいつまでも、われわれを見守っていただきたいと思います。ありがとうございました。

投稿

私考「大阪の空、八尾空港、そしてオスプレイ」

会員 藤原 知（洲本市）

問題提起だけで具体化は政府の責任と、念押ししながらの大阪市長と知事からの申し入れである。

「…八尾空港をオスプレイの訓練に活用…沖縄の負担を軽減するために…大阪はオスプレイを受け入れる用意がある…」

今でもオスプレイは、日本中どこでも自在に飛ぶことができる。日米間でそう話がついている。今回の話を受けて、アメリカから何の反応も出てこないのは当たり前である。その限りで今回の騒ぎは屋上屋を重ねる話で滑稽である。

さて、ほんの一昔前、大方の大阪市民は物怖じしない新鮮な切り口の、ストレートな橋下氏の弁説に魅せられて、住みよい大阪への変革の夢を託して、橋下氏を市長の座に押し上げた。

橋下氏が主導する効率性優先の都市改造と都市づくり。新自由主義の法被を着せられての住みにくい都市への悪しき変貌。福祉、文化と生活の面で住みにくい大阪への転落。

そして、橋下氏と彼の維新の会が描く大阪と日本の未来図にもほころびが見え始めている。

今もって正論とする「従軍慰安婦」を巡る橋下氏の妄言が、彼らの人気の下降を後押しした。この頃、彼らの政治的低落は加速していて目をみはるものがある。

もともと政策ではなく、見てくれでもってきた橋下氏を盟主とする維新の会。なりふり構わず「アントニオ猪木」とタッグを組んだりして、人気挽回に大わらわ。

こうして、今回の波紋を呼ぶ発言も人気挽回の総路線の中にある。

ところで、今回の発言とその周辺事情を巡って論議するにあたっては、四つの論点があるように思われる。

第1は公人—ここでは市長としてであって政党代表としてではない—として、この種の発言をしても、そこに適格性はあるのか。第2に、発言内容に問題



10万3千人が集まったオスプレイ反対県民大会（沖縄県）

はないのか。第3に、発言を支えた政治的手法に特段のものはあったのか。そして第4に、発言にあたって前もって、常識にかなう手続きのないし礼儀がとられているか。以上の4点である。

まず第1の論点。多数決型直接民主主義で選ばれた市長。行政一般について、市民の信託を得ていることは間違いない。しかし、具体的な個別の案件についてはそうではない。

多数決型直接選挙に勝利して、市政一般については信託を得ているという現実の威を借りて、個別案件についても信託を得ている体になりすまして、それを恣意的に処理するという構図。今回の発言においても見られた構図であり、私人ないし党代表（公人であるが）としてならともかく、別の人格の公人（市長）の発言としては、きわめて不適當である。市長の名を借りてやるべきでない。

第2の論点。名にし負う改憲保守主義者の発言である。発言の培土の部分では、保守主義の火が燃えさかっている。

安保は断固手放さない。恒久平和を希求して、生活を擁護する平和憲法に反対する。

こうした信念の延長線で、この発言は語られてい

4面からつづく

る。歴史を前向きに前進させるようなメッセージはない。歴史の歯車を逆転させる立場からの発言には大義がない。どんな理屈を講じたとしても。

未来と理想を見据え、安保のないオスプレイのない日本を洞察をもって思考する。そんなメッセージが何もない。それがこの発言の持つ決定的な問題点である。

第3の論点。やりやすい面もある、やりにくい面もある生きた現実、多様な側面を持つコンプレックス(複合体)である。ご近所の理解を前もって得ておく等、煩瑣(はんさ)なことはまずやらない。地域住民の意見も聞くことはしない。こうして万障を取りつくろった上で、難なくできる問題提起としての発言をさせてもらう。

こうして、邪魔者を排除することにした上で否応なく、やりやすい形にして恣意的に好きなようにことを進める。

この場合、後で起こった問題の解決については、そこで話し合っ解決できれば良いし、最終的には選挙の結果に委ねても済むとする。

ちなみに今のところ、自らの2度にわたる成功に味をしめて、彼らが多数決型直接民主主義をこよなく愛しているのもご愛嬌である。選挙に負けて泣き面になることもあるというのに。

第4の論点。家族とご近所の面々にちゃんとごあいさつができていますか。当節ながらの礼法を身につけて社会に生きているか。

あいさつを通して現実的には意味がないとして、あいさつするのを退ける。最終的には政治家らしく選挙で決着つけければ良いと選挙にもってくる。その気配りのない高慢な態度をもってしては、成るものも成らない結果を招くこと必定である。

さて、右の四つの論点をふまえ橋下氏に成りかわり、橋下氏の発言などそのありようを思索的に追体験する、そしてその中で、発言そのものについての探索もさることながら、総体としての政治家、橋下氏自身の本性の解明に一定程度迫り得たと思っている。

橋下氏は、発展し展開する未来やあるべき理想に目を閉ざしたままに、限られた現実の中でのみ思索し行動する形而上学の人である。

同時に、未来と理想につなげないままに現実の枠の中に現実を閉じ込め、その限りで自在に現実を展開できない小市民的発想の持ち主であり、来世を迎えるにふさわしく、物事のなるにあたって即達性、迅速性、効率性をいたく愛する新自由主義の徒でもある。

さて、凡人なら自滅の淵に落ちるのだが、超人は次なる起死回生の一手を打つべく必死の面持ちを浮かべて構えている。

どんな策が、たとえサプライズで出されても、それを喝破する用意はある。

憲法改悪を狙う自民の補完勢力を自ら買うて出る維新の会の思惑を砕き、平和・民生の住みよい日本を引き寄せるために奮闘するものである。

ご活用ください！ I C A N新パンフレット

前回の「反核医師の声」に核兵器廃絶国際キャンペーン「I C A N」の一環で発行されたパンフレット「壊滅的な人道被害」を同封しました。I C A NはInternational Oampaign to Abolish Nuclear Weaponの略で、核兵器禁止条約の多国間交渉を2015年までに開始しようという世界の人々と政府の声を高めるキャンペーンです。

追加でご活用いただける場合は、必要部数を無料で送付いたしますので、ご連絡ください。

☎ 078-393-1807 担当、平田まで



核兵器の悲惨さをビジュアルで訴えるパンフ

核戦争を防止する兵庫県医師の会は松井一郎大阪知事のオスプレイ訓練の大阪誘致発言に対する抗議文を６月５日に発表した。

松井一郎大阪知事のオスプレイ訓練の大阪誘致発言に抗議する

２０１３年６月５日

核戦争防止する兵庫県医師の会

報道によれば、貴職は６月６日に菅義偉官房長官と会談し、沖縄配備の米軍輸送機オスプレイの訓練の一部を大阪府内で受け入れる意向とのことである。

私たちは、昨年、オスプレイの沖縄県配備の計画が発表されて以来、配備計画の中止を求めてきた。オスプレイは、開発に携わった関係者からも「構造的欠陥」が指摘され、現に事故を多発させてきた。しかも沖縄県配備だけでなく、日本でのオスプレイ運用に関する米軍報告書（環境審査報告書）では、全国の各低空飛行訓練ルートで年間約５５回、計３３０回もの低空飛行訓練を行うことが明記されている。日米両政府は、人口密集地の上空の飛行を回避するなど「安全確保」のための運用ルールを合意したが、沖縄県が昨年１２月、県内２７市町村と共同で行った目視調査では、昨年１０～１１月だけで運用ルール違反の飛行が３１８件にのぼるとして政府に検証を求めた。しかし防衛省は、「明確な合意違反は確認されなかった」との検証結果を報告するとのことである。結局、米軍の訓練は野放し状態で、住民の安全のためにはオスプレイ配備の中止・低空飛行訓練中止するしかない。

どこからみてもオスプレイの配備、低空飛行訓練は、危険きわまりないものであり、だからこそ沖縄県の県知事・県議会・県内４１市町村すべての首長・議会、全国知事会、低空飛行訓練空域の２００自治体が反対決議をあげているのである。

兵庫県においても、米軍戦闘機の低空飛行攻撃訓練が、兵庫県などの集計で、１９９４年から２０１１年１２月までの約十八年間に４５２日もの飛行が確認されている。この低空飛行訓練ルート（ブラウンルートと呼ばれる）にオスプレイも加わる計画は断じて許せない。兵庫県弁護士会も反対声明を発表している。

そのオスプレイの訓練を大阪府に誘致しようとの計画は、大阪府民にとってはもとより関西全域の住民の安全を脅かす暴挙であり強く抗議する。大阪誘致の理由として挙げている「沖縄県の基地負担の軽減」を言うのであれば、沖縄米軍基地からのオスプレイ撤去と米軍普天間基地の無条件即時撤去こそ求めるべきである。

私たちは隣県兵庫県の県民として、命を守る医師として、貴職が、「オスプレイの訓練受入れ」の意向をきっぱりと否定することを要求するものである。

今年も平和大行進にぜひご参加ください

平和行進は１９５８年に始まり、核兵器廃絶を求めて全国の市町村を結び８０００キロメートル以上を行進するイベントです。国連や世界の代表が広島・長崎に集まる８月の原水爆禁止世界大会の成功をめざし、炎天下の中を歩き続けます。

毎年、核戦争を防止する兵庫県医師の会からも多くの先生や医療機関のスタッフさんが参加しています。今年もぜひ、みなさんご参加ください。各地への到着時刻やルートは同封のチラシをご覧ください。また、参加される先生はぜひ、事務局までご一報ください。取材に伺わせていただきます。



伊丹市役所で行進者を激励する小泉運営委員

非核の政府を求める兵庫の会 市民学習会

安齋育郎講演会

こんどの騙しは手ごわいぞ
—改憲マジックと原発「安全神話」—

日時 6月22日(土) 16:00～17:30

会場 兵庫県保険医協会 5階会議室

参加費 1000円

協賛 神戸YWCA平和活動部/市民社会フォーラム/日本科学者会議兵庫支部

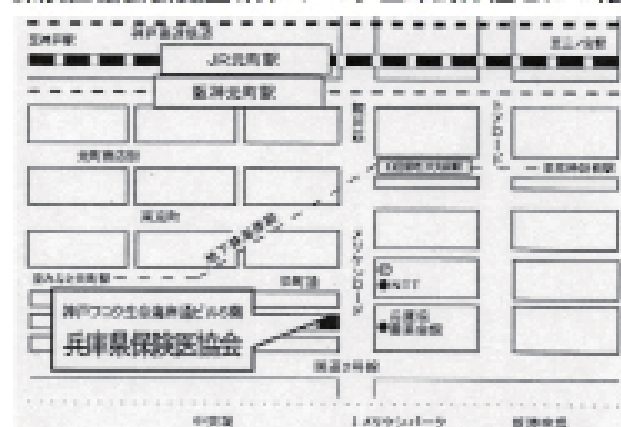
お問い合わせは、事務局 電話 078-393-1833 FAX078-393-1801 e-mail shin-ek@doc-net.or.jp まで

きたる参議院選挙では、改憲と原発が大きな争点になります。憲法9条を変えて戦争できる「普通の国」にするためには改憲の発議要件を定めた憲法98条を変えたり、福島原発事故の「終息宣言」をして再稼働をすすめたり・・・そんな姑息な騙しを見破ることが有権者に求められています。長らく原発の危険性を警鐘されてきた立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長の安齋育郎さんに、改憲の危険性と原発「安全神話」に固執する勢力のトリックを明かしてもらい、平和で安全な日本に向けた道についてお話しいたします。



安齋育郎（あんざい いくろう）さん
安齋科学・平和事務所所長、立命館大学特名
誉教授、立命館大学国際平和ミュージアム
名誉館長。専門は、放射線防護学、平和学。
趣味は、マジック。
著書は、『「原発ゼロ」プログラム—技術
の現状と私たちの挑戦』（共著、かもがわ出
版、2013年）、『原発事故と理科・社会』
（新日本出版社、2012）、『原発と環境』
（かもがわ出版、2012年）など多数。

保険医協会会議室(神戸フコク生命海岸通ビル5階)



JR・阪神「元町」駅下車東口から南へ徒歩7分

非核の政府を求める兵庫の会 市民学習会

イラク人質事件・今井紀明さんが今明かす 「自己責任」バッシング乗り越え若者支援へ

日時 2013年 9月 7日(土) 18:00~20:00

会場 神戸市勤労会館

お話し 今井紀明さん(NPO法人D×P共同代表)

※どなたでもご参加できます(申し込み不要)。参加費1000円



今井紀明(いまい のりあき)さん
NPO法人D×P共同代表。1985年北海道札幌市生まれ。18歳のときにイラクで人質に。その経験から5年後に精神的に復活。通信制高校向けのキャリア教育事業「クレッシェンド」や専門学校等の中退予防の事業を行っている。

神戸市勤労会館

神戸市中央区雲井通5丁目1-2
電話 078-232-1881

市営地下鉄・JR・阪急・阪神・ポートライナー各3官駅から東へ徒歩5分

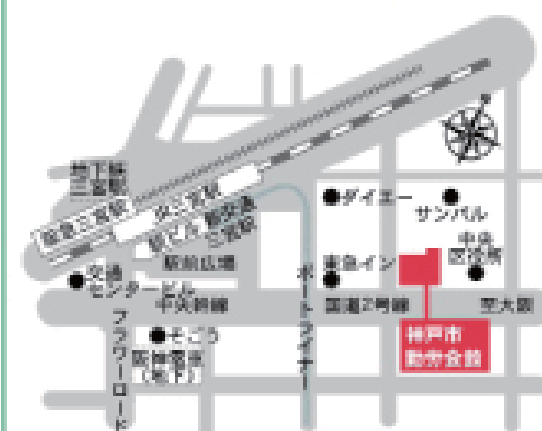
10年前にアメリカが行った大義なきイラク戦争に、日本はまっさきに加担しました。戦争は過去の話ではなく、その後遺症は甚大です。

2004年4月、イラクボランティアの高辻菜穂子さん、戦場カメラマンの棚山総一郎さんとともに、イラクのファルージャ近郊で人質となり、帰国後は「自己責任」バッシングに苦しめられた今井紀明さんに、講演いただきます。

悩み苦しんだ今井さんは、2年間の英国留学を経て、大分県の大学を卒業後、大阪で商社に勤務し、昨年からは、行き場を失った通信制高校生らを支援するNPO法人「D×P」を運営するまでに、立ち直られました。

今井さんの戦場体験を聴くなかで、私たち日本人のイラク戦争での「加害責任」を受け止め、新自由主義のキーワードにもなった「自己責任」論を検証しましょう。

会場 地図



協賛：神戸YWCA 平和活動部、市民社会フォーラム

お問い合わせは、事務局 電話 078-393-1833 e-mail shin-ok@doc-net.or.jp まで

核戦争を防止する兵庫県医師の会 第32回総会記念講演

再稼働される原発のリスクと 再生可能エネルギーの世界の情勢

日 時 8月31日(土) 15:00～17:00

会 場 兵庫県保険医協会 5階会議室

講 師 民間事故調(福島第一原発事故独立調査検証委員会)委員長

内閣官房・事故調提言フォローアップ有識者会議 座長

独立行政法人科学技術振興機構 前理事長 **北澤 宏一** 先生

参加費無料

どなたでもご参加歓迎です



民間事故調委員長の北澤宏一先生に、福島原発事故と原発のリスクを問い、脱原発に向けて再生可能エネルギーによる日本復興の「百年の計」を語っていただきます。

北澤宏一(きたざわ こういち)先生

独立行政法人科学技術振興機構顧問。東京大学大学院修士課程、マサチューセッツ工科大学博士課程修了。東京大学工学部教授、科学技術振興機構理事などを経て現職。日本学術会議会員。専門分野は物理化学、固体物理、材料科学、磁気科学、超伝導工学。特に高温超伝導セラミックスの研究で国際的に知られ、80年代後半、高温超伝導フィバーの火付け役を果たす。2009年度応用物理学学会業績賞を受賞。3.11以後は、福島第一原発事故独立調査検証委員会(民間事故調)委員長、内閣官房・事故調提言フォローアップ有識者会議座長、日本学術会議・エネルギー政策の選択的分化会委員長などを務め、原発事故の究明とリスクの検証、代替エネルギーとしての再生可能エネルギーの普及について取り組まれている。著書に『日本は再生可能エネルギー大国になりうるか』『科学技術は日本を救うのか』(Discover 21)など

核戦争を防止する兵庫県医師の会 TEL.078-393-1807 FAX.078-393-1802 <http://www.hhk.jp/pamw-hyogo/>
〒650-0024 兵庫県神戸市中央区海岸通 1-2-31 神戸フコク生命海岸通ビル 5F 兵庫県保険医協会気付

参加申込 兵庫県保険医協会 FAX078-393-1802 または shin-ok@doc-net.or.jp まで

核戦争を防止する兵庫県医師の会講演会(8/31)に参加します

() 人 所属・医療機関名 お名前

当日お越しの希望者の方には、講師の北澤先生よりご提供いただいた
「福島原発事故独立検証委員会調査・検証報告書」を無料でお渡しします。

募金にご協力ください

日韓反核医師交流のつどいに加藤運営委員を 代表派遣します。

私たち「核戦争を防止する兵庫県医師の会」は昨年、近畿反核医師懇談会の一員として韓国反核医師の会執行役員で東国大学教授の金益重（キム イクチュン）氏を招き、市民公開講演会「韓国の原発問題」を京都で開催し、加藤代表世話人が参加しました。そこで、韓国反核医師の会と日本の反核医師の会の交流を今後も精力的に行うことが決まりました。今回はこうした経緯から全国反核医師の会として韓国を訪れて、韓国反核医師の会の医師らと交流するつどいを企画しました。今回のつどいでは、韓国反核医師の会の案内で慶州の原子力発電所や中レベル核廃棄物処理場を見学します。

今、橋下徹維新の会代表の「慰安婦は必要だった」とする発言や、閣僚の靖国神社参拝、憲法改悪による「国防軍」の創設を目指す政府や自民党などにより日本と東アジア諸国の関係は非常に厳しいものになっています。さらに、政府間だけでなく、市民の間でも在日韓国・朝鮮人に対するヘイトスピーチを伴う嫌韓デモも起こっています。

このように日本と韓国は、不幸な戦争のせいで、いまだ「近くて遠い国」と思えるところも多いですが、反核・平和運動に国境は要りません。同じ東アジアの一員として、今後とも協力しあって運動を進めていくために、今回のつどいに加藤運営委員を代表として送り出します。ぜひ、参加費の募金にご協力ください。

運営委員（兵庫県保険医協会理事長） 池内 春樹

※募金は同封の振込用紙をご使用ください

※郵便振替 01130-6-57830 核戦争を防止する医師の会

日韓反核医師交流の旅

反核医師の会（PANW）、韓国反核医師の会（Doctors Against Nukes : D A N） 交流企画

●日 程 2013年7月13日〈土〉～15日〈月・海の日〉

●行程概要

7月13日 関西空港発 11:25 大韓航空機 12:50 プサン着

慶州へ移動、原発施設見学（月城原発）& 交流

7月14日 午前 慶州見学、午後 ソウルへ移動（K T X 新幹線）

夕刻 D A N（韓国の反核医師の会）との交流と懇親

7月15日 ソウル市内で交流、観光等。夕刻のフライトで帰国

●参加費用 約15万円〈航空券・宿泊費・全行程食事・懇親会費用等含む〉

この件に関するお問い合わせは、☎078-393-1807 平田 まで